

第二言語としての日本語におけるアスペクト習得

ードイツ語母語話者を対象にー

折原有実（上智大学大学院生）

本研究では、母語に進行形がない日本語学習者が日本語のアスペクト形式であるテイルをどのように習得していくのかについて論じる。

テイルは、日本語教育において初級段階から導入される基本的な文法項目の1つで、中心的な用法として「動作の継続（赤ん坊が泣いている）」と「結果の状態（窓が開いている）」の2つがある（寺村1984）。アスペクトの習得研究では、白井（1998）、Andersen & Shirai（1994, 1996）らによって、アスペクト仮説が提唱され、母語に影響されない普遍的な習得パターンがあることが指摘されている。また、第二言語としての日本語の習得研究では、テイルの用法の使用に関して、「動作の継続」の方が「結果の状態」より習得されやすいという一般的な傾向があるとされる（許1997, 2000; 菅谷2004等）。しかし、これらの研究では、母語に「動作の継続」に対応する進行形はあるが、「結果の状態」に対応する文法形式はない学習者を対象にしたものが多く、母語から影響を受けた可能性が考えられる。

一方、ドイツ語は、進行形を持たない言語で、アスペクトは一般的に形態素では表されず、副詞や他の形式を用いて表現される（藤縄2010）。ドイツ語母語話者による英語のアスペクトの習得研究では、英語で進行形を産出すべき文脈において、進行形の過少使用が観察されている（Dürich2005）。これらのことから、日本語においてもドイツ語母語話者は、進行形にあたる「動作の継続」のテイルを過少使用するのではないかと予測ができる。そこで、本研究では、以下の2点を研究課題とし、ドイツ語母語話者を対象にテイルの使用状況を調査した。

1. 母語に進行形がある学習者と進行形がない学習者で、テイルの用法の使用に差が見られるか。
2. アスペクトにおける習得パターンは、どの学習者の母語にも影響されない普遍性を持つか。

調査方法は、1) コーパスデータ（国立国語研究所「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」）の分析と2) 絵描写タスクでの産出データの分析である。前者は中級レベルの日本語学習者（L1ドイツ語15名、L1英語17名）を対象に、後者は初級から中級レベルの日本語学習者（L1ドイツ語12名）を対象に調査を行った。

調査の結果、ドイツ語母語話者と英語母語話者のテイルの用法の使用には、同じような傾向が見られた。両者とも「結果の状態」より「動作の継続」の方が使用できており、先行研究での一般的な傾向を支持する結果となった。しかし、ドイツ語母語話者には、母語の影響と考えられる「動作の継続」のテイルの過少使用が多く見られた。また、「結果の状態」のテイルについては、ドイツ語母語話者の方が英語母語話者より使用できていた。これは、ドイツ語の「sein受動態」と呼ばれる「結果の状態」に近い意味を持つ文法形式が関係していると考えられる。

以上のことから、本研究では、ドイツ語母語話者によるアスペクト習得において、母語の影響は見られるが、それが習得パターンの普遍性を変えることはないということを結論付けた。